

## 論文

### 明治期における政商型貿易人（Ⅱ）

中 川 清

#### 目 次

- 12. 陸海軍御用達
- 13. 山県有朋との親交
- 14. 疑獄事件
- 15. 帝国劇場の設立
- 16. 美術収集

## 12. 陸海軍御用達

「陸軍省の用命を受けた大倉喜八郎」と、「海軍省の御用命を受けた高田慎蔵」が、日清・日露両戦後における戦時利得の稼ぎ頭として「東西の両大関」であると、横山源之助が『明治富豪史』に指摘していることは既に触れている。そして、大倉喜八郎の「成り金」ぶりが派手であったことから、「石コロ罐詰」の軍への納入といった兎角の悪評がつきまとっていたことは良く知られている。

根拠のない悪意に満ちた風評とはいえ、大倉喜八郎とその一族にとって、この「石コロ罐詰」は余程気になっていたと思われる。喜八郎の追憶文集である『鶴翁余影』にも、この「石コロ罐詰」伝説に関するコメントが散見される。

例えば、法学博士下村海南は、「歌人鶴彦」と題した回想のなかで、「(日清)戦役の罐詰の石では数多い下請負の中でやった事とて、聊(いささ)か気の毒である」と、民衆の間に流布した噂を肯定しながらも、大倉喜八郎に同情している。一方、当時の流行作家村上浪六は、「罐詰めの中へ石を入れるなどと云ふケチな考えの人間では、どうして、あれほど大をなし得るか」と、喜八郎自身の談話を紹介している。

大倉と高田が、日露戦争の稼ぎ頭として「東西の両大関」と断じた横山源之助も、岩崎家と三井家の両財閥は別格としている。

第一物産株式会社『三井物産会社小史』(1951年)には、創設時から昭和15年に至る迄の「三井物産会社利益金年度別表」が記されている。日清戦争の前後(明治26年及び29年)と、戦時中の2年間(同27年及び28年)並びに、日露戦争の前後(明治36年及び39年)と、同じく戦時中の2年間(同37年及び38年)の同社利益金の推移を示すと、以下の通りである。

三井物産会社年度別利益金	
明治26年	302,000 千円
27年(日清戦争)	633,000
28年(— “ —)	1,087,000

29年	850,000
36年	1,668,000
37年（日露戦争）	2,211,000
38年（一 〃 一）	2,347,000
39年	2,188,000

日清・日露の両戦時年度とも、その前後の年度に比べて利益金が増加していることは、上表で明らかである。

三井物産、大倉組及び高田商会のいずれもが、帝国陸海軍に対して進んで協力したのは、単に利益追求だけのためではなかっただろう。「日露ノ風雲暗澹ヲ極メ」ていた明治37年2月、三井物産会社々長名で「訓示」が出されているが、「国家ノ為メ商業的戦争ニ盡瘁センコトヲ熱望ノ至リニ堪ヘズ」と結ばれている。出征軍人が身命を賭して戦っている「壮烈ニ想到」し、「商務ニ当」ることが三井物産社員に対して要請されていた。

三井物産、大倉組そして高田商会の三社が、いずれも明治期を代表する兵器商社であったことは、泰平組合の結成によって見事に示されている。明治41年7月、陸軍大臣寺内正毅宛に

三井物産合名会社代表社員	社長三井八郎次郎
合名会社大倉組	頭取大倉喜八郎
高田商会主	高田慎蔵

の連名をもって、泰平組合結成の「御願」が提出されている。兵器輸出の寡占体制を確立したシンジケート組織については、拙稿「明治・大正期の代表的機械商社高田商会（下）」（『白鷗大学論集』第10巻第1号 1995年）の「第7章 泰平組合」で詳しく触れているため、ここでは割愛する。

ところで、余剰兵器の輸出を目的としている泰平組合は、主要市場として中国大陆に焦点を定めていたが、他市場への兵器輸出にも積極的であった。例えば、三井物産はメキシコへ2万挺の小銃を輸出しているが、更に、現地における兵器製造会社設立に対して、メキシコ政府から協力を要請されていた（外務省編『日本外交文書 大正二年第一冊』）。

大正 3 年（1914）に勃発した第一次世界大戦にわが国も参戦しているが、日露戦争から10年が経過していた。空前の戦時景気がもたらされた日本からは、ロシアを含めた連合国への武器輸出が増加していた。例えば、大正 4 年 12月13日の東京日日新聞は、鈴木商店が「ロシアからの砲弾注文を引受ける」と伝えている。これは、陸軍省の仲介によってロシア政府から四百万発の砲弾を注文したもので、神戸製鋼所及び川崎造船所において製造される予定であることが報じられている。

戦時下そして革命の動乱下にあったロシアには、三井物産、高田商会などの兵器商社は駐在員を派遣していた。そして、大正 6 年（1917） 5 月、高田商会ロシア駐在員牧瀬豊彦が革命軍の銃弾によって命を失っている。

三井物産の現地採用雇員今井政吉が、東京朝日新聞に大正 6 年 5 月12日から 6 月 1 日にかけて、埋花畔人の筆名で発表したといわれる「露都革命見聞録」には、この間の事情が詳しく記されている（この「露都革命見聞録の全文は、菊地昌典の解説とともに「歴史と人物」昭和46年 9 月号に再録されている）。

日露戦争当時、ヨーロッパにあって明石元治郎大佐（のちに陸軍大将）が、反ロシア政府勢力支援の謀略工作に従事していたことは良く知られている。そして、この工作に協力していたのが高田商会ロンドン支店である。陸軍と関係の深い大倉組あるいは三井物産も当時のロンドンに支店を設置していたが、明石が敢えて高田商会の協力を求めたのは、他の 2 社よりも高田商会の能力を高く評価していたためであろう。

そして、日露戦争が終ると、高田商会は今度はロシア政府に武器を提供していたと思われるが、兵器商社の変り身の早さがうかがわれる。革命下のロシアにあって命を失った高田商会社員牧瀬豊彦もまた、「死の商人」といわれていた兵器商社の犠牲者であったと言えるだろう。

一方、大正 6 年に大倉組から大倉商事に改組されているが、大正14年には子会社として仏国通商株式会社が設立されている。この会社は、昭和12年に国際産業株式会社（払込資本金25万円）に改編しているが、その目的の一つ

は、欧州からの陸海軍兵器の輸入である（勝田貞次『大倉・根津コンツェルン読本』〈日本コンツェルン全書10〉春秋社 昭和13年）。

昭和14年、陸軍省の監督下に「国産兵器の積極的海外輸出と陸海軍所要の外国製兵器及び軍需要原材料、機械類等の輸入」のため、昭通商株式会社が設立されている。この国策会社の株主は、三井物産及び大倉商事そして、高田商会に代って三菱商事の三社によって構成されていた（防衛研究所戦史室編『陸軍軍需動員（2）実施篇』）。

### 13. 山県有朋との親交

山県有朋は、その晩年に到るまで陸軍のみならず政界に対して隠然たる影響力を維持していた。冷酷な老政治家といったイメージが濃厚な山県であるが、彼の周辺にいた人々には充分な配慮を惜しなかった。岡義武『山県有朋』（岩波親書 1958年）には次の一節がある。

「大正八年十月寺内正毅が危篤に陥ると、山県は原首相に対して大勲位、従一位、侯爵に叙するよう要望（中略）、大勲位、従一位が死去とともに贈られた。それは当時の慣行からはまったく異例、破格の措置であった」。

更に、「翌年七月には山県は原に対し、枢密顧問官石黒忠恵を日本赤十字社長であったという理由で子爵に昇するよう要求した」。結局、原首相は「やむなく山県の要望を容れた」。

高田慎蔵と寺内正毅が極めて親しい関係にあったことは、山本四郎編『寺内正毅日記—1900～1916』（京都女子大学 昭和55年）の記述で明らかである。また、大正4年12月の衆議院予算委員会では、朝鮮総督であった寺内正毅大將（のちに元帥）と高田慎蔵の関係が追求されている（拙稿「明治・大正期の代表的機械商社高田商会（上）（下）」『白鷗大学論集』1995年）。

一方、陸軍軍医総監の職にあった男爵石黒忠恵と大倉喜八郎はともに同郷人でもあり、親しい関係にあった。喜八郎が私財を提供した大倉商業学校（現在の東京経済大学）の設立に際しては、石黒忠恵の助言を得ている。

山県有朋と益田孝の関係については、「第11章 権力者とのつながり」で

既に触れている。益田孝、大倉喜八郎、高田慎蔵ともに、山県有朋とは直接あるいは間接的にも親しい関係にあったが、様々な人間が入りこんでいる。

文人実業家として知られる箒庵高橋義雄は、山県有朋と極めて親しい関係にあった。高橋の自伝的随筆『箒のあと』と彼の詳細な日記『萬象録』は、明治期以降昭和初期に至るまでのわが国近代史の興味深い傍証的資料となっている。

ところで、高橋箒庵日記『萬象録 卷四』（思文閣出版 昭和63年）の大正5年11月30日の項には、〔高田家の山縣公欽待〕の見出しとともに次の記述がある。

「午後七時、妻と共に高田慎蔵氏の晚餐會に出席す。山縣公、貞子婦人、大倉喜八郎男、同衆馬夫人、下條正雄、井上通泰、佐々木信綱の数客にて、主人は高田慎蔵、同養子釜吉及び夫人にて、西洋館に於て洋食の晚餐を饗せり。（中略）欧州上流家庭の晚餐會は総て斯く如しとなり。当日の料理献立は釜吉氏が指図にて、山縣公の口に適するを専要とし、総て軟き物を選びたるが東京に於ては蓋し是れ以上の西洋料理なかるべし。其献立書は左の如し」。

日記には、前菜からデザートにいたる12品目の献立が記載されているが省略する。続いて、〔高田慎蔵氏の葡萄酒癖〕の見出しがあり、「西洋酒は高田氏が最も上等品を所蔵せりとて常に自慢し居る程ありて」とあり、ドイツ及びフランスから輸入された良質のワインに関する記述がある。そして、「高田氏は今猶ほ十数年前に買入れたる葡萄酒を貯蔵し、近来欧州戦争に因り良葡萄酒の輸入全く杜絶せしに拘らず猶ほ四、五年位は輸入を仰がずして差支（え）なしとの事なり」。

その夜の晚餐会には山県有朋も大いに満足した模様で、「散会せしは十一時頃なりき」と記されている。

更に、同年12月11日の日記には、〔山縣老公の伽藍洞臨席〕が記録されている。伽藍洞とは、高橋箒庵が赤坂一ツ木に所有していた邸宅である。

「正午、山縣老公及び同夫人、大倉衆馬夫人、益田多喜子来宅（後略）」

とあるが、大倉衆馬夫人とは、喜八郎の四女トキである。大倉衆馬は帝国大

学工科大学土木工学科を卒業し、喜八郎の婿養子となるのがのちに大倉土木組（現在の大成建設）社長に就任している。益田多喜子は益田孝の側室であり、山県有朋夫人の姉である。伴席者は、山県有朋と気軽に会話を楽しめる女性を中心に、いかにも内輪の晩餐会の感じである。

この席でも、山県有朋の好みにあわせた「老人向食物」が供されている。山県は「誠に理想的の懐石にして今日は有り難く殆んど其全部を盡せりとて、頗る気に入られたるやうなりき」と、高橋箒庵は記している。

ところで、大倉糸馬夫人トキは、山県有朋あるいはその夫人貞子に余程気に入られていたのだろうか。その後も、山県有朋夫婦を主賓とする宴席に、父喜八郎とともに再三にわたって陪席している。

『萬象録 巻八』には、大正9年12月4日にも〔高田家の山縣公招待〕の記事がある。「午後五時半、湯島三組町高田慎蔵氏邸の洋風晩餐会に出席す。当夜は山縣公夫婦、大倉喜八郎男、大倉糸馬夫人、井上通泰、佐々木信綱と余と相客八人にて、亭主方は主人慎蔵、養子釜吉夫婦なりき。釜吉氏が山縣公の口に適するやう全て柔き者づくめの洋食を工夫し、酒は同家の得意物にて四、五十年前の者より古きは八十年前のブランデーなども出して最も鄭重なる餐応なりき。余興は新橋芸者瓢たんの手踊、同君太郎、卯の葉兩人賤橋帶手踊あり（後略）」。

そして、その翌日には、甲州財閥を代表する根津嘉一郎による〔山縣公招待〕の宴が開かれている。高橋箒庵のほか、「老公夫婦、大倉喜八郎男、同糸馬夫人相客」とある。

当時の有力財界人達が競って山県有朋を招待していた状況が、『萬象録』の記述からうかがうことが出来る。そして、こうした宴席につらなっていたのは、いずれも益田孝、大倉喜八郎そして高田慎蔵の関係者達である。本来、競争相手であるべき益田、大倉、高田の三名が、山県有朋という権力者の周辺にあって互いに親交関係を結んでいたことになる。

三井家の最高顧問の職にあった井上馨と、益田孝が親しい関係にあったことは「第11章 権力者とのつながり」で既に触れた通りである。

益田孝の人脈は、明治期におけるその他の権力者にもひろがっていた。例えば、高橋箒庵の日記『萬象録』の大正2年10月9日の項には次のような記事がある。

「夕刻明石町益田氏宅に赴く、桂公病氣危篤に就き側室お鯉が預り居る公の忘れ形見なる女子某、愈（いよい）よ公に面会する事となり唯今其面会を終りたるが、幸ひに公の知覚明瞭にして右女子を見て非常に喜びたる由、お鯉より電話にて委細申し来りたるを余は側で聴聞せり」。

ここに引用した記述は、陸軍大臣そして数度にわたって首相を歴任した陸軍大将桂太郎が、死の直前にあってその庶子を認知した経緯を伝えている。明治期を代表する軍人政治家の極めて私的な側面に益田孝がかかわっていたことをうかがわせるが、この日から2日後に公爵桂太郎は逝去している。

#### 14. 疑獄事件

益田孝、大倉喜八郎そして高田愼蔵のいずれもが時の権力者達と深くかわりあっていたことは、これまでに記した通りである。また、彼等が統率するいずれの会社もが、陸海軍を中心に各種政府機関への物資の調達納入を主要業務としていた。こうした状況のなかで、ここにとりあげる三人が関係する会社が、大きな疑獄事件にまき込まれたとしても不思議ではない。

ところで、大正期を代表する疑獄事件に、シーメンス・ヴィツカース事件と八幡製鉄所疑獄事件がある。そして、この二つの事件には、三井物産、大倉組及び高田商会の三社がそれぞれ関係していた。

明治期日本海軍の主要艦のほぼ全部が英国で建造されており、そのほとんどがアームストロング社製であった。そして、同社の日本総代理店が高田商会である。

その競合会社であるヴィツカース社の代理店に起用されていたのが三井物産であるが、受注競争では高田商会に対して著しく遅れをとっていた。

気骨あるジャーナリストとして知られていた古島一雄は、雑誌「日本」明治40年3月1日号に「海軍軍人の富を有する者、一を山内満寿治と為し、而



して山本権兵衛これに次ぐ。軍人致富の術を知らんと欲せば、去って造船所に問え」と記している。山内万寿治海軍中將は、明治期海軍にあって造兵造艦の最高責任者であったが、高田商会と密接な関係にあったことは広く知られていた。古島一雄が「去って造船所に問え」と断じたのは、そこに様々な利権が渦巻いていると考えたからであろう。

新鋭艦「金剛」の建造に関して、アームストロング社とヴィツカース社との間に受注競争が演じられたのが、シーメンス・ヴィツカース事件の発端である。

高田商会の強力な支援者であった山内海軍中將に対して、三井物産は松本和海軍中將を起用したが、これが海軍高級將校に対する贈賄事件に発展した。大正3年7月の判決によって、三井物産会社の3人の取締役飯田義一、岩原謙三、山本衆太郎並びに、同社々員2名が有罪となっている。

三井物産の競合相手である高田商会側の山内万寿治中將も検事の追求を受け、自殺未遂に至っている。この時、高田愼蔵も証人として審問されたことが、この事件に関する海軍軍法會議判決書に示されているが（『日本政治判例史録一大正』第一法規）、山内中將の自殺未遂によって高田商会に対する疑惑の追求は打ち切られている。

この疑獄事件の根底にあったのは、日本における先発納入業者アームストロング社と、後発者であるヴィツカース社との競合である。後者の代理店である三井物産ともども、後発者としての焦りがあった。

一方のアームストロング社は、新たな兵器市場として早くから日本に注目していた。明治19年（1886）には、バルタサー・ミュンターがアームストロング社の中国及び日本向けの代理人に起用されている。ミュンターは、1837年にコペンハーゲンで生まれた海軍々人である。そして、「ジャーデイン・マセソン商会の日本代理人大倉喜八郎の世話で、（中略）東京に家を一軒構えることになった」のは明治22年（1889）であると、長島要一『明治の外国武器商人―帝国海軍を増強したミュンター』（中公親書 1995年）は記している。その後、高田商会がどのようにしてアームストロング社の日本代理権を

手に入れたのか、その経緯は不明である。

一方、明治40年7月、アームストロング社、ヴィツカース社及び北海道炭礦の三社によって日本製鋼所が設立されている。当初は、高田商会が日本製鋼所の代理店に起用されていたが、大正3年以降、同社は三井の傘下に入っており、三井物産の役割が大きくなっている。

大正6年、官営製鉄所、鉄道院九州鉄道管理局及び、福岡鉱務署の多数の幹部職員が収賄事件で収監されている。同年12月には、当時の平岡検事総長が福岡に下って直接指揮をとるほどの事件に発展しているが、その翌年には、八幡製鉄所長官押川則吉が自殺に及んでいる。

この事件では、九州鉄道管理局の関係で三井物産石炭部長長岐繁が罰金250円の有罪判決を受けている。ついで、大正7年12月28日の判決では、八幡製鉄所の技師3名を含めて、7名の民間人が有罪判決を受けているが、そのなかに下記の3名がいる。

合資会社高田商会無限責任社員	高田信次郎
合資会社高田商会事務長	柳谷己之吉
株式会社大倉組取締役	大倉発身

三井物産、大倉組及び高田商会の各社と、陸海軍並びに諸官庁との結びつき、そして、その政商的体質を摘出したのが、これらの疑獄事件である。こうした不祥事件の責任を負った形で、大正6年、66歳になっていた高田慎蔵は大磯の別荘に隠棲している。

なお、前記の疑獄事件については、前出の拙稿「明治・大正期の代表的機械商社高田商会」所収の「第5章 アームストロング社と高田商会」及び「第8章 経営破綻への道（2） 八幡製鉄所疑獄事件」に詳しい。

## 15. 帝国劇場の設立

欧米文明を慌しく攝取していた明治期にあっては、新しい文化の形成にも積極的であった。明治19年8月、のちに伊藤博文の女婿となる末松謙澄の提唱によって演劇改良会が設立されている。その目的は、歌舞伎に新味をとり

いれ「活歴」と呼ばれていた新史劇などに優れた作品を作り出し、あわせて劇作家の地位を向上するとともに、新しい劇場を設立することであった。

伊藤博文のお声がかりもあって、井上馨、依田学海、福地桜痴、森有礼、澁沢栄一など各界の有力者が主要会員となっていた。更に、大隈重信、西園寺公望、陸奥宗光、三井養之助、大倉喜八郎、益田孝などが賛同者に名を連ねていた。

ところで、演劇改良会が目指していた近代的な劇場が設立されるのは、それから20年後である。

高橋箒庵『箒のあと 下巻』（秋豊園 昭和8年）に「帝国劇場の使命」の項がある。その記述によれば、日露戦争後の高揚した気分のなかで、「海外文明国より、今後陸続と貴賓が来遊する場合に、之を接待する大劇場を所有せぬのは、一等国たる大日本国の国辱である（中略）」と云ふやうな議論を私共の間で闘はして居ると、時事新報社長福沢捨次郎が、大に之を賛同し、（中略）伊藤博文公に同意を求めた処が、公も亦比説に共鳴せられたので、澁沢栄一、大倉喜八郎、近藤廉平、藤山雷太」など有力実業家達の協力が得られた。

伊藤博文、西園寺公望など明治の元老の賛同を得て、明治39年10月に帝国劇場株式会社設立発起人会が開催されているが、澁沢栄一、福沢捨次郎、福沢桃介、西野恵之助そして、益田孝の長男太郎などが発起人として出席している。翌年2月には、資本金120万円をもって帝国劇場株式会社が設立された。澁沢栄一を会長に選出しているが、専務取締役役に就任した西野恵之助が事実上の社長である。更に、取締役役として大倉喜八郎、福沢桃介、益田太郎ら6名が選任されている。

前述の高橋義雄（箒庵）は、「当時私は、三井鉱山理事であったから、其内規に従って、発起人若しくは役員とならず、唯文藝顧問として、聊か之に参加したのみであった」と記している。また、高橋の『箒のあと』の記述によれば、三井及び三菱の両財閥ともに、「各千五百株を引受けて」いる。

三菱が所有していた丸の内の土地2,300坪の敷地を取得して、建坪645坪、

地下を含め25階建の帝国劇場が竣工したのは明治44年2月である。

帝国劇場の取締役役に就任した大倉喜八郎は既に71歳に達していたが、この近代的な劇場になみなみならぬ関心を寄せていた。大正3年11月、澁沢栄一が帝劇社長を退任すると、代って大倉喜八郎が新社長に就任した。

帝国劇場に関係した劇作家の伊坂梅雪は、鶴友会編『鶴翁余影』（昭和4年）に「趣味より見た大倉翁」を寄せているが、「翁は暗い芝居と、舞台面の汚ない世話物は大嫌ひであった」と記している。

大倉喜八郎の庶子である大倉雄二の『鯨一元祖“成り金”大倉喜八郎の混沌たる一生』（文藝春秋 1990年）には、上演される芝居の内容とは無関係に、常に明るく華やかな照明を要求していた喜八郎の我儘振りに劇場関係者が困惑していた様子が描かれている。

益田孝の長男太郎は、益田太郎冠者の筆名で明治37年頃から世相を風刺した軽演劇を執筆していたが、帝国劇場の取締役役として精力的に台本を書いている。明治44年5月に上演された第一回帝劇女優劇のために、益田太郎冠者が書いた「ふた面」は好評を得た。帝劇の看板女優であった森律子のために、次々と台本を書いていった益田太郎については、拙稿「太郎冠者を名乗った実業家－益田太郎の生涯」（『白鷗法学』 7号 1997年3月）がある。

## 16. 美術収集

大倉喜八郎は、維新後から少しずつ古美術品を集めていたと言われている。そして、海外に流出しようとしていた桂昌院（将軍綱吉の生母）の御霊屋を買い求めて邸内に移築した頃から、本格的に美術品を収集している。

大正4年に男爵を授爵された大倉喜八郎は、これを記念して収集美術品を一般公開することにした。大正6年には、財団法人大倉集古館が設立され、大倉喜八郎は土地1,824坪及び建物4棟、約3,700点におよぶ美術品及び書籍1,500冊に維持費50万円を加えて財団に寄附している。喜八郎が50年にわたって収集した美術品は、仏教美術の彫像と画像、蒔絵品、中国の堆朱器、中国石仏、古銅器などであった。なかでも、堆朱器の収集は、その量と質におい

で世界に冠たるものであると言われていた。

大正7年5月1日、朝野の名士1,300人を招いて大倉集古館の開館式が開催された。そのあと、帝国劇場に導かれた招待客のため、京劇の名優梅蘭芳の妙技が披露されている（大成建設株式会社『大成建設社史』昭和38年）。

大正12年の関東大震災によって、大倉集古館も焼失した。かつて陸軍軍医総監の職にあり、喜八郎と親交のあった石黒忠恵子爵が『鶴翁余影』に寄せている文章に、「震災の為に建物は焼け、美術品は五分の四は焼けて了った」とある。そして、焼失を免がれた約3,000点の美術を中心に、昭和2年に大倉集古館が再建された。第二次大戦の戦火を免がれた大倉集古館は、隣接するホテル。オークラとともに閑雅なたたずまいを見せているが、財団法人大倉文化財団によって運営されている。

なにかにつけ一流好みの大倉喜八郎は、昭和2年、当代一流の彫刻家として知られていた高村光雲・光太郎に自分の彫像制作を依頼している。あれこれと、勝手な注文をつける喜八郎に高村父子は手を焼いたようであるが、高村光太郎は昭和6年に「似顔」と題する詩を作っている。

わたくしはかしこまってスケッチする

わたくしの前にあるのは一箇の生物

九十一歳の鯨は奇観であり美である

鯨は金口を吸う

（中略）

このグロテスクな顔面に刻まれた日本帝国主発展の全実歴を記録する

九十一歳の鯨よ

わたくしの欲するはあなたの厭がるその残酷な似顔ですよ

（『愛と青春の詩—高村光太郎詩集』〈大和書房 1965年〉所収の「似顔」による）

山梨県長坂町にある白樺美術館には、高村光太郎作の拳大の小さな頭部だけのブロンズ像が所蔵されているが、光太郎によって「鯨」と形容された喜八郎像であると言われている。

ところで、前出の『鶴翁余影』に、高橋箒庵は「死ぬまで修行主義」と題する文章を寄せている。それによれば、大倉喜八郎は六十歳になって「本阿弥光悦の書風を習ひ始め（中略）毎朝五時頃より起き習字の稽古を為し「光悦の筆法に自習する所あり」。こうして、「光悦風の書を能くし」た喜八郎は、「晩年に於ては殆んど専門家の域に達して居た」と言う。

大正期を代表する美術鑑賞であった箒庵高橋義雄は、更に次のように記している。「名誉慾、知識慾、美術慾、趣味慾等凡百の慾望に充ち充ちて居た」喜八郎であるが、その慾張りは「何処までも露骨に徹底して居るのが甚だ愉快で、到底常人の及ばぬ所である」。

更に、公共事業や慈善事業に対する大倉喜八郎の寄附行為について、箒庵は次のように記している。

「他人の発起した事業で其痕跡の後日に残らざるものに対しては大して寄附されなかった。即ち翁の寄附を為すや必ず大倉何々を云へる名稱の附く事業か若くは最も人の注意を惹くやうな国家事業に限」っていた。

一方、益田孝は、茶道研究家によって「利休以来の茶人とも称された近代の大数寄者であった」と評価されている（筒井絃一ほか『益田鈍翁 風流記事』淡交社 平成4年）。

茶人・美術収集家としての益田孝を詳しく描いた伝記に『鈍翁 益田孝上・下』（新潮社 昭和 年）がある。茶道を良く知る白崎氏は、『三溪 原富太郎』あるいは『耳庵 松永安左エ門』など、美術収集家として知られる実業家達の伝記を書いておられるが、『鈍翁 益田孝』も丹念に調べられた伝記である。

ところで、前出の『益田鈍翁 風流記事』には、益田の自筆による「風流記事」と「茶智くらべ」の写真版が所収されているが、茶人としての鈍翁を知るうえで興味深い資料である。前者は、明治29年から同37年までの期間において、益田の自宅である碧雲台で開催された茶会の記録である。後者は、昭和3年及び4年の夏、軽井沢の別荘における益田鈍翁の茶日記である。これらの記録は、いずれも、晩年の益田孝に信頼されていた道具屋平松常造に

与えられたものである。

更に、この『益田鈍翁 風流記事』所収の筒井絃一「鈍翁と茶道」には、次の一節があるので引用させていただく。

「鈍翁が蒐集した道具は、昭和二十八年五月に嗣子太郎が没したあと、孫義信の手によって処分が行われたが、年間四回ずつ蔵から持ち出してはトラックで運ぶという作業をつづけて、十五年間継続したというのであるから、いかに龐大なものであったかがわかる」。

これまでに何度も引用している高橋箒庵の大冊の自伝的隨筆集『箒のあと上・下』に、「高田慎蔵氏の風骨」と題する文章がある。そして、箒庵は、慎蔵について次のように記している。

「（慎蔵は）内外に信用を博し、朝野各方面に知人多く、書画骨董を好んで、折々風雅の会合を催すなど、東都紳商中に在って、一種異様の風骨を備へて居た」。

更に、「高田氏は格別学問をした様子もないが、佐々木信綱氏に就て、晩学ながらも和歌を学」んだ。また、「高田氏は中年より思ひ立て佛画並に宋、元、本朝古画を蒐集し、下條桂谷画伯を顧問として、其選択を任せたので、収蔵の富は東都一方の重鎮たるに至った」。なかでも、「弘法大師筆と稱する木筆不動の大幅」が群を抜いていた。そして、この大幅の画像に基いて、高田邸の園遊会「不動祭」が毎年開催されていた。

しかしながら、高田慎蔵の「歿後間もなく起った大正十二年の大震災では、湯島の本邸が烏有に帰し、上記数々の書画も一炬に付して了（しま）ったが、氏が生前此悲慘を見るに及ばずして、遠逝したのは寧ろ幸運であったかも知れぬ」と、高橋箒庵は記している。

高田慎蔵の所蔵品は震災で焼失し、益田孝が集めた莫大な道具類は戦後になって入手に渡っている。僅かに、大倉喜八郎の美術収集品の 20 パーセントほどが戦火を免がれて大倉集古館に収蔵されているのは、幸運と言えるだろう。

終りに

三井物産、大倉組（のちに大倉商事）及び高田商会は、いずれも明治・大正期を代表する商社であるが、各種軍用物資を陸海軍に納入することによって大きく成長していった。従って、これらの各社を設立した益田孝、大倉喜八郎及び高田慎蔵の３人は多分に政商的存在であった。そして、彼等に共通する「政商型貿易人」という側面に焦点を定めて本稿を書きすすめていったが、断片的な記述に終始する結果となった。

一方、本稿執筆の過程で興味が横道にそれてしまったが、その結果、「文人実業英高橋義雄の生涯」及び「太郎冠者を名乗った実業家―益田太郎の生涯」を書きあげ、それぞれ『白鷗法学』第６号（1996年10月）及び第７号（1997年３月）に発表することが出来た。

この２人の文人実業家は、いずれも本稿でとりあげた３人とは密接な関係にある。本稿の執筆が思わぬ方向に発展して、高橋義雄と益田太郎という興味ある人物に辿り着いたと言える。

ともあれ、近代日本が形成された明治・大正期に活躍した経済人の業績を様々な角度から描き出す仕事を、これからも続けてゆきたいと思っている。

（本学兼任講師）